



TITLE:

3-4 雑感：台湾に来て考えたこと (3.
外から見た京大)

AUTHOR(S):

安藤, 雅孝

CITATION:

安藤, 雅孝. 3-4 雑感：台湾に来て考えたこと (3. 外から見た京大). 京大地球物理学研究の百年(II) 2010, 2: 67-69

ISSUE DATE:

2010-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169896>

RIGHT:

雑感 — 台湾に来て考えたこと

台湾中央研究院地球科学研究所 安藤雅孝

はじめに

1974年4月から2000年3月までの26年間、私は京都大学防災研究所に勤めた。所属した研究室・研究センターには「地震予知」の名が付いていたが、私自身は地震予知に向けた研究はしていなかった。その意味で、私は役立たずであった。その後、名古屋大学理学・環境学研究科に移り、2007年に退職し、以後、台湾中央研究院地球科学研究所に勤務している。

京大防災研時代に始めた私の研究の多くは、結末もつけずに途中で止めたものが多いが、現在も取り組んでいる課題が一つだけある。それは海底地殻変動観測で、キネマティックGPSと音響測距の2つの技術を組み合わせて、海底の位置を決めるものである。用いる技術は最先端とはいえないが、深さ数千メートル海底の位置を1cmの精度で決めるのは、じつに難しい。10数年前、地物専攻の修士論文発表会で、「1mの精度しかない観測を、どうやって1cmの精度に上げるのか、その方法を述べよ」との質問が、私の指導学生にあった。なかなか厳しいものだが、当時私自身も良い答えはなかった。私が名大に移る際、京大で博士号を取得したばかりの田所敬一さんも名大で採用された。田所さんや学生諸君の奮闘もあって、数年の内に、3-5cm程度の精度に達した。現在、日本では、海上保安庁も同じような観測を定常的にこなっている。海上保安庁は、船底に音響信号を送受信するトランスデューサーを備えた専用船を持ち、本州沖17カ所で観測を行っている。その測定精度はもうすぐ1cmに届きそうだ。

台湾でも、日本に周回遅れで、海底地殻変動を始めることになった。こちらでは、調査船や観測システムなど難問が山積みである。しかも、私が赴任してから始めたので、準備期間も短かった。それにも関わらず、多くの人の助けを貰い、この計画を始めることができた。今は、台湾で新しいシステムを作り、台湾の周辺の海域を測器で埋め尽くそうとの夢を追っているが、実現にはまだ数年かかりそうである。そんな由で、日々準備や観測に追われており、ここでは思いつくままの雑感でお許しいただきたい。

日本で思ったこと

私は、1ヶ月に1回ぐらい日本に帰っており、かつ毎日、NHKの海外放送を観ているので、あまり日本から離れている気がしない。実際、沖縄本島まで飛行機で1時間半、とても近い。街には漢字が氾濫しており、それらの意味も6-7割程度は分かる。台湾の人の親切さも手伝って、外国であることを忘れさせる。そんな生活をしている私だが、日本に行くと、やはり「違う」と感じるものがいくつかある。

まず、最初を感じることは、電車でお年寄りに（あまり）席を譲らないこと。今年、日本の地下鉄に乗っていて、腰が90度にも曲がった高齢のご夫婦が車内に入って来たとき、誰も立とうとしなかったのには、凍りつく思いがした。見てはいけないうるものを見たような気がした。台湾ではまずありえない。特に気負って席を譲るわけではなく、ごくありふれたことなのだが。

じつは、私自身、台北の電車で席を譲られたことがある。それまでは想像もしていなかったことなので、一瞬間の中はパニックになった。「どうぞご心配なく」とゼスチャーでとっさにお断りした。好意に対して、快く座るのが礼儀とあとで教えられたが。台北の街でも、若者のカップルが街の中で抱きあったり、キスをしているのは、日本と変わらない。若者を道徳教育で締め上げているわけではない。とても自由な国である。なぜ違いが生じたのだろうか。日本は交通マナーが良く、歩行者にはとても優しいのだが、近い距離で親切にするのが苦手なのだろうか。

もう一つの違いは、日本では、研究発表のタイトルもスライドもほとんど日本語。台湾では、タイトルやアブストラクトは英語が普通。てっきり英語の講演かと思って行くと、中国語で話し始められ、面食らうこともある。しかし、スライドが英語なので助かる。学生がセミナーで発表する際にも、ほとんどスライドは英語で準備する。博論審査の発表会でも、スライドはもちろん英語だが、外国人の私がいたら、発表まで英語でしてくれた。スライドが漢字なら分かりやすいかというと、必ずしもそうではない。理解できない言い回しや、日本と異なる意味で使われる漢字もある。特に、テクニカルタームは、英語で書いて

くれると助かる。日本から来た私ですらこんな状態である。非漢字圏の人達には、スライドも発表も中国語ではお手あげであろう。その意味では、台湾では国際化の努力がされている。

私が勤める研究所では、事務関係の書類も、研究所間のソフトボールの試合の結果も、中国語と英語のメールが流される。研究者が英語に堪能なのと、事務関係者の中にも、英語を書ける人がいるためだ。事務書類の英語は、こんな風に表現するのかと、感心して読むこともある。司書の女性も流暢な英語で本を探してくれる。この研究所では、**native speaker** のように英語を話す人も少なくない。日本の大学では、国際化が叫ばれているようだが、大学の通知も講義も講演発表もスライドも、すべて日本語では、留学生や外国人研究者には辛いことだろう。ただし、私が頭にあるのは、10年前の京大と3年前の名大と現在客員教授をしている琉球大学だけであって、すべての大学を知っているわけでない。

世話人の竹本修三さんに、「外国人が参加する学会では、せめてスライドだけでも英語で作ったらどうだろうか」と2010年の幕張の地球惑星関連連合大会で話したら、そのことを集録(Ⅱ)に書けと言われた。そんなことから、この雑文を書くことになった。

大学の国際化

私は、桃園空港の近くの国立中央大学の客員教授をしており、9月からの上半期、大学院向けの講義を週2時間受け持っている。もちろん、私の大変拙い英語を使わざるを得ないので、学生諸君にはいつも申し訳なく思っている。それにも関わらず、学生も出席してくれ、質問や発表もしてくれる。日本だったら、院生がこんな面倒な講義に来てくれるだろうか、と考えてしまう。

中央大学の地球物理研究所(日本の大学院専攻科に相当)にはギリシャ人の火山地震学の教授がいる。彼から先週こんなことを言われた。EOSに日本の大学の教授の公募が掲載されていたが、「国籍は問わないが日本語で講義ができること」と条件が書いてあったが、そんな外国人がいるだろうか。あれは国際化のポーズを取っているだけで、基本的に外国人を締め出しているのではないかと。むしろ国際化を叫ぶなら、英語で講義の方が、留学生にも日本人の学生にも都合が良いはず、と言われた。私は、日本ではすべての教授が**assistant**を雇うほど豊かでないから止むを得ないかもしれない、と曖昧な返事をした。でも、そうならばEOSに募集を出す必要ないかもしれない。このギリシャ人の意見に私は基本的に賛成だが、京大地球物理学教室ではどうなのだろう？

現在、国立中央大学では、英語の講義数や留学生数を増やす努力がされている。学生の英語教育にも力を入れているとのことだった。たしかに、今年の私の講義に出席している院生は7人だが、内訳は、台湾人3名、インド人、フランス人、フィリピン人、バングラデッシュ人各1名である。さらに、国立台湾大では、ほとんどの専門教育は英語でされていると聞いた。台湾は日本に比べ、人口は18%、国土は10%、GDPは8%に過ぎないが、これだけのことはしている。日本はもう少し頑張ってみてはどうだろうか。

台湾から、海外の大学院に進む割合は、日本よりはるかに高い。もっとも、「最近の学生は安穏と台湾で暮らすのを望み、海外に行かなくなった」と嘆いていた先生もいた。昔は、大学院進学希望者のほとんどが、海外の大学を選んだようだ。私が訪問した地球科学関係の教室には、教員全員が欧米の大学で博士号を取得している例も少なくなかった。しかし、日本の大学で博士号を取った人は、少なくとも地球科学にはいなかった。聞いてみると、日本は簡単に博士号を出すので信用できない、とのことだった。こんな話を2カ所で聞かされ、耳が痛かった。最終生産物である研究者に差異はないはずだが、こんな印象を持たれているとすれば残念である。このためか、台湾で日本の大学院進学希望者に、私は一度も会ったことがない。

私の勤務先

中央研究院は、南京政府の時代、1928年に設立され、蒋介石軍と共に台湾に移った。大学や他の国立研究機関が教育部などの省庁の下にあるのと異なり、内閣に直属する機関である。総予算は年間4億米ドルとのことであり、日本とのサラリーの差を考慮すると、日本では8億米ドルに相当する予算規模であろう。周囲4kmの敷地に、31の研究所とセンターが置かれている。その構成は、人文・社会学系、数物系、生命科学系と3つに分かれるが、現在勢いがあるのは、生命科学系である。新しい建物が次々建設されている。

中央研究院の中に、私が気に入っている施設が2つある。その一つは、3階建ての大型の総合体育館。テニスコートやバスケットコート、プールや1周150mのトラック、種々の運動器具などの設備がある。

朝 7 時から夜 10 時まで開いており、会費を払えば部外者でも使用ができる。施設の目的は職員の健康維持とのことで、勤務時間中に使用して構わない。「こんな施設を日本で作ったら事業仕分けにあうだろう」というのが地球物理学教室の平原和朗教授の感想だった。私も、当初 3 ヶ月はここには熱心に通ったが、その後は一度も行っていない。しかし、日本からの訪問者には、是非こんな施設を大学や研究機関にも作ったら、と案内することになっている。もう一つは、歴史語言研究所の歴史文物陳列館である。ほとんどは、南京政府時代からの収集品で、ミニ故宫博物院との感じである。そこには、石器時代から清朝までのコレクションが展示されている。観光客で混雑する故宫博物院とは違い、落ち着いた雰囲気で見学できる。中央研究院には、このほか 6 種類の美術館や博物館があり、ここで昼休みや週末を過ごすのも楽しい。これらの博物館は、一般公開もされている。

地球科学研究所は、地球化学、地質、地球物理の分野で構成されている。その中では、現在は地球化学に勢いがある。地球化学には 10 名の外国人研究員やポスドクがいるため、このグループでは、セミナーはすべて英語とのことだ。研究所の人員構成は、研究員が 30 名、研究技術員が 7 名、ポスドクが 20 名、助理 (assistant) が 80 名である。研究技術者は、観測網や測定機器などの開発や維持管理を担当するが、多くは博士号を取得しており、自主的に研究をする人もいる。このようなポジションは、日本ではほとんど見られないが、機器開発や観測の際には相談にのってくれるので助かる。

台湾

定まった領土や領域があり、人がそこに住み、支配する政府を持つ集団を国家と呼ぶとすれば、台湾は立派な国である。私は、これに加え、人権が守られ、民主的な国を近代的国家と呼びたい。その意味で、台湾は立派な近代的な先進国である。しかし、台湾と国交のある国は 23 カ国で、その多くは、中南米諸国やオセアニアの小国である。日本をはじめとする主要な国は、台湾は中国の一部とみなし、正式な国交はない。ただし、現実には中国の実効的な支配は台湾におよんでいないので、多くの国は、実質的な「大使館」を台湾に置いている。日本は、「財団法人交流協会」という名の事務所を置いている。この協会の建物には、日本の国旗が立っているわけでもなく、外見ではどのような団体か分からない。一方、台湾も、「台北駐日経済文化代表処」との名で、日本に「大使館」や「領事館」相当の事務所を置いている。中国は、台湾が「台湾」との名を正式名として使うことを極度に嫌う。したがって、オリンピックも台湾の国名は、Chinese Taipei である。歴史的な経緯や現状を私がここで述べる必要はなかろうが、国際政治とは、一般の人間には理解しがたいものである。国際政治にも、裁判員制度のような制度があれば、台湾は国としてきっと認められるだろう。

台湾の前政権 (民進党) は、国名を台湾として、国連に加盟手続きを取る運動を続けてきた。それ自体は、私はまともな方針と思うが、アメリカなどの反対を受けて実現性はなかった。その上、多くの国民は中国との緊張関係は望んでいなかった。最近の緊張緩和のお陰で、徴兵制もじきに廃止されるらしい。何よりも国民は、中国との経済交流による景気の回復を望んでいたと思われる。さらに、前総統 (大統領) の汚職腐敗のため、民進党は総統も国会の多数も失った。この結果、国民党が多数を握り、中国に急速に接近し始めた。あれほど共産党と対峙し、大陸反抗を叫んでいた国民党が親中国となった。歴史とは不思議なものである。この 2 年間の変化は大きい。それまでなかった、中国大陆への直交飛行機便が認められ、今や便数は膨大な数になった。私も、昨年福建省に行ったが、たしかに直行便は便利だ。ただし、台湾海峡の上は飛行禁止区域とかで、大きく迂回するため 3 時間もかかったが、まっすぐ飛べるようになれば、1 時間ぐらいで着くだろう。中国大陆はじつに近い。現在台湾の各地の観光地は中国人観光客で溢れている。また、どの売り場も Made in China ばかりである。台湾の経済は、中国に大きく依存するようになった。

さらに、兩岸経済文化交流、兩岸研究協力も盛んである。ここで、「兩岸」とは台湾海峡兩岸との意味で、「両国」と名付けないのは、微妙な問題を避けるためであろう。中国は、「台湾は中国の一部」との原則を貫くため、台湾人が中国に入国する際は、「中国人」として扱うらしい。ただし、私が会った台湾人の中で、中国との統合を望んでいる人はいなかった。用いる言葉は中国語、ルーツも似ているのだから、将来は一緒になるのではと私が聞いたところ、それならアメリカはイギリスと一緒にいるか、と反論された。台湾は今後も変化を続けるだろう。その結果は、日本に大きな影響をおよぼさざるを得ない。日本は台湾にもう少し関心を向ける必要があるだろう。